

## 第三百二十六 育児法

中川「有るとも／＼まだ澤山ある、子供を育てるには玩具の種類畫本の良否行儀作法の仕込方讀書や習字の稽古なんぞと必要な點が澤山あつて一朝一夕に説き盡せないが君に一つ調べて貰ひ度いのは家庭教育の主義と方針だ子、近頃は小兒を育てるには放任主義とか自由主義とか云ふ大間違の言葉が流行してそれが為めに小兒が非常の不幸に陥る様だ、西洋で放任とか自由とか云ふのは壓制とか干渉とか云ふ言葉に對照したので料理法で云へば強い火加減に對して弱い火加減を用ゐると云ふ譯だらう、即ち或る程度を指したのだ、それを我邦の人は何も氣儘勝手に育てなければ放任で無い自由で無いと心得て大切な子供を野放し同様に育てるものが多い、實に飛んでも無い不心得と言はなければならん子、動物を飼つても知れるでないか、野放しの犬と教育した犬とは孰れが上等であるか、藪鶯と飼つた鶯とは孰れが妙音を發するだらうか、人に譬へても訓練した兵士と訓練しない兵士と孰れが上等だらうか、誰にだつて分りそうなものだ、つまり子供を野放しに育てるのは野蠻風だ、文明に進む程規律的に發育させなければならん、行儀作法や言葉遣ひと言ふ事に最も重きを置いて上品に優美に育て上げなければならん、只そこに程や加減と云ふ事があつて壓制に過ぎてもならず放任に過ぎてならず、物を教へるにも注入的では小兒の腦を惱ますから誘導的に啓發すると云ふ工合がある、丁度料理する時強きに過ぎず弱きに過ぎざる火加減で無ければケーキやシューが膨れ無いと同じ事だ、然し誰にも皆なその加減が出来る譯でないから平生の心得が要る、僕の考へでは小兒を育てるに寧ろ嚴に失するも緩に失してはならん、干渉に過ぎてても放任に過ぎてはならんと思ふ、今の世の社會に立つて何の某と云はれる人物を質して見給へ、父親に嚴しく仕込まれたとか母親が賢婦人であつたとか或は祖父母が兄弟に感化されたとか大概家庭教育のお蔭を受けない人は無い、野放しに育つて大業をなした人は殆ど世界中にあるまい、よく自然に任せるの自由に任せ

るのと云ふが人の子を猿に預けたら、決して人間並の者は出来んぜ、然るに我邦は自由とか放任とか云ふ言葉が流行する為め父兄がそれを誤解して自分の子供を野放しに育てる、野蠻人の子だか下等社會の子だか分らない様に育てる、中流以上の良家の子弟にさへ野放し育ちが澤山ある、小兒計りで無い、大きくなつた娘や息子、書生さんや女學生を見て野放し育ちが澤山あるでないか、行儀作法も知らず言葉遣ひは下等人物同様で一舉一動が悉く感情任せと云ふ動物性の人間も寡く無い、實に野蠻界の有様を現出して居る子、と云つて極くの幼年時代から厳しくしるとは言はんが段々生長する程子供には制裁を加へなければならん、世人は二三歳の小兒を大層撫育するが段々大きくなる程放任して了ふ、それが大間違で段々大きくなるほど制裁を加へなければならん」大原「少し待ち給へ、君の様に言ふと人の子供は幾歳になるまで家庭教育の必要がある子」

## 第三百廿七 三十歳の小兒

家庭教育の年限は一問題なり、中川も興に乗じ「それは一々子供の情態によつて違ふ場合もあるが先づ誰にも應用すべき標準はだ子、僕の主義から云へば女の子は嫁に行くまで、男の子は四十歳迄だらう」大原「ナニ四十歳、して見ると僕等もまだ家庭教育を受ける身分だ」中川「勿論さ、人の生涯に小兒の時代が二度ある、一つは家庭の小兒、一つは社會の小兒だ、三十歳近くまで學校教育を受けてそれから初めて社會へ生れるのは社會の小兒になるのだ、家庭の小兒も野放しにして置けないと同様に社會の小兒を野放しにして置く程不心得な事はあるまい、倅がモ一學校を卒業しましたから安心だと云ふが學校を卒業したのは社會に對する初聲を擧げたので、まだ匍ふ事も立つ事も出来ない人間を野放しに置かれて溜まるもので無い、親の目から見れば社會に向つて二度目のお産をするのだから愈よ益々監督を嚴重にしなければならん、男の三十歳前後は生涯の運命が岐れる時で野放しにされても僥倖にして明るい道へ匍ひ出したものは出世の山へ進めるけれども暗い道へ匍ひ込んだら段々深い谷へ落ちる計りだ、處世の事も其通りであるが僕の最も心配するのは人の生命が此の時代に大變化を起す事だ

子、此に醫者の調べた正確なる統計表がある、日本全国の人口をその年齢と対象するに兒童の數が一番多くつて其の次ぎは順序よく減じて行く中に只一つ三十五歳以上四十歳以下と云ふ時代に男女とも急劇の減少がある、此の時代が外の年齢よりも一番多く人の死ぬ時だ、それから先きは再び平均して行く、此時代の生存者は次の時代の生存者より寡い、四十歳以上四十五歳迄の人が我邦に千人あるとすると三十五歳以上四十歳迄の人は九百人より無い割合だ、順序から云へば若い人の方が老年の人より多くなければならんが三十五歳以上四十歳迄が特別に寡い、醫者は此の時代を以て人の最も危険なる時期と云ふ、それは畢竟多くの人が三十前後に不養生をするからだ、飲食の不養生は勿論精神の不養生も何の不養生も丁度社會に生れた小兒時代に多い、其時代には體格も氣力も旺盛の様に見えるから何の不養生をしても左程に弱らない、何を食べても平氣だよ、三日位徹夜したつて何とも無いと無闇に威張て態々極端な不養生を自慢するのが丁度此の時代の人達だ、その不養生が積もり積り三十五歳以上四十歳以下の年齢に不治の病氣を發する、其時になつてモ一後悔しても追付ない、是は畢竟監督者無しに社會へ産み落されて野放しにされるからだ、何ぼ放任主義が可いと云つて一二歳の小兒を臺所へ手放しにして見給へ、毒な物でも何でも口へ入れるだらう、三十歳前後の男子が社會へ野放なしにされるのは丁度それと同じ事だ、生命の上から云つても其の通りだが事業の上から言つても三十歳前後の人は多く無理計りする、僥倖で小さな成功をするとさも自分の技倆の様に慢心して忽ち手一杯な仕事にかゝる、それが為めに生涯の大失敗を招くもの比々として皆な是なりさ、四十歳までは誰でも小兒時代勉強時代と心得なければならん、四十歳を越してから初て社會の大人になれる、然るにその小兒時代を野放にするほど憐むべき事は無い、親が無ければ親戚の老巧者に監督して貰ふとか或は誠實なる先輩に保護を頼むとか、何でも一人の監督者を得なければならん、親があつたら我子の四十歳になるまでは充分の家庭教育を施して社會の大人に仕上げで遣らなければ親の役目が濟まんでないか」と相も變らず奇矯なる一家言、

## 第三百廿八 門前の人

主人の言葉奇なりと雖も深く人生の事を味ひなば争ひ難き事實の存するあらん、客の小山好き口實を得たりと思ひ「中川君、四十歳迄の家庭教育を取調べるとなつたら大原君が十人あつてもまだ足らんよ、此に於てお登和さんの洋行が愈よ必要なる事を悟る子」中川「アハ、それは随分お登和を洋行させて食物問題や家庭問題を調べたら多少の獲る所があるかも知れない、然し今急に何とも極められん子」小山「ナニも急ぐ事は無い、來年になつても構はんからその方針にして置き給へ」中川「だが子、大原君の洋行した後にお登和が西洋へ行くととなつたらお代さんの方から何んな苦情が出て大原君が迷惑するかも知れん、大原君の事が無くつてお登和を洋行させるなら僕も望む所だけれども、子」大原君、君は定めし迷惑するだらう」大原「爾うさ、僕は迷惑しないとも限らんが然し僕の事がある為めお登和さんの洋行を妨げるのもお氣の毒だ子、僕は別に關係せんよ」小山の妻君が笑ひ出し「お登和さんが洋行なさればお代さんも負けない氣になつて洋行すると云ふかも知れませんが、お代さんに西洋まで追驅られては大原さんもお困りでせう子」大原「それこそ大迷惑」と談笑の聲高かりけるに小山の妻君フト耳を敬て「あんまり大きな聲をなすつて若しやお代さんが立聽して居ると不可ませんよ、何うも先刻から門の外を人が往つたり來たりする様ですがもしやお代さんではありますまいか、大原さん、ちよいと窓から覗いて御覽へさい」と云はれて大原立つて窓外を眺め「ア、爾うです、お代さんと下女と門前に立つて居ます、僕はモ一歸へりませう、中川君大きに御馳走さま」とそこ／＼に暇を告げ恐る／＼中川家の門を出でたるに門前に立てるお代嬢、今日は前日の如き元氣無く、そつと大原の側に寄り「満さん、あんまり遅いから心配して迎ひに來たのよ」と打萎れて悲し氣に言ふ、大原も少しく哀れを催し「ツヒ話しが長くなつて遅くなりました」と優しく答へぬ、お代嬢愈よ悲し氣に「満さんはイツ西洋とかへ行くの」大原「何れ四五日内です」お代嬢「アラ四五日内なの、わしも先刻父様に頼んで西洋へ遣つて貰ふ事にしたワ、小山さんの所で二月か三月色々な事を習つたら來年あたり西洋へ行つても宜いつて」大原驚き「貴嬢が洋行なさるつて、それは大變、西洋へ行くなら第一西洋の言葉を覚えなければなりません、迎も二月や三月でそれが覚えられるものでも無し、それに男の洋行と違

つて女の洋行は入費も非常にかゝります」お代「父さんが千圓位は出してても宜いつて」大原「千圓や二千圓で も洋行の出来るものでありません、第一に女の洋服から拵へなければなりません、貴嬢は小山さんの家で一生懸命に勉強していらつしやい」お代嬢「じゃ満さんはイツ歸るの」大原「先づ三年間の約束です」お代嬢「三年なんて長いこんだ子」とシク／＼泣きながら満の手を執りて我家へ伴ひ行く、

## 第三百廿九 花飾り

是より數日の後食道樂會の第一回は大原満の送別會を兼ねて愈よ廣海子爵の家に開かれたり、參聚の時刻は午後一時、來會者は皆な約束を重んじて一人も遅刻せるもの無し、妻や娘を伴へる老人連は多く家庭教育會の會員なり、英氣勃勃として我こそ姫君の選に預からんと心竊に期する所あるは獨身者の若紳士なり、中川兄弟は主人方の手傳ひ役、小山夫婦は來客の間を周旋し、大原満は快然として得意の色あり、料理法研究の爲めにとて中庭に假の料理場を設け、テンピ、七輪、西洋鍋に至るまで來客の觀る前に順序能く並べられ、篤志の料理人兩三輩各所持の仕事に取かゝる、座敷の廣間には長き食卓へ清らけき布をかけ、卓上の器物は云ふも更なり、花瓶に挿したる美しき花々は自ら人の眼を悦ばしむ、席上に年若き紳士あり、金縁の眼鏡を眼の上ならで鼻の上の邊りに載せながら眼鏡越しに座敷の隅々まで眺め廻し「オイ中川君、少し君の説明を聞き度い事がある、君は平生何でも實用主義を唱へて風流は國の害だとか美文は教育の妨げだとか頻に我が黨を攻撃されるが、此の卓上に花を飾つてあるのは何の譯だ子、此の花を摘んで食べると云ふ實用主義か、それとも卓上の裝飾か」と言葉に角を立て、詰問するは同じ學校の出身にてつむじの曲りし人なむめり、中川は微笑を含み「無論裝飾の爲めだ、然し無用の裝飾で無い、實用の裝飾だ」若紳士「是れは面白い、食べられもしない花を飾つて實用の裝飾と云ふからは天下何者か實用ならざらん、君は此に至て我黨の主義に降参したか子」と妙に中川へ突つかゝる、中川は好んで對手にもせず「大層六か敷くなつて來た、別に何の意味でも無い、只會食の時に人々の目を悦ばしめる爲め花が飾つてあるのさ」若紳士「宜しい、

それならば風流も人の心を悦ばしめる為め、美文も人の心を悦ばしめる為めだからそれを無用とは何う云ふ次第だ」と頻に責めかけられて中川も今は黙つて居られず「僕は風流と美文を無用とは言はない、似非風流は亡國の基、似非美文は子弟教育の害になると云ふ、然しそれは今此で説明する場合で無いが食卓に花を飾るのは食事の愉快を増さしむる為めだ、君なぞは食物を舌で計り味はふと思ふから間違つて居る、食物の味を心に感ずるのは眼と鼻と舌との三つである、盲目者は別にして誰でも先づ食物に對すれば眼を以てその躰裁を視る、如何に味の良い御馳走でも盛り方が亂雑で皿が不潔であつたらば食べる氣にならん、第一に人の食慾を起さしめるものは眼の働きた、其次は鼻で皿の中から香ばしい匂ひが鼻を掠めればそこで一段の食慾を起す、悪い匂ひが鼻を衝いたら忽ち胸が悪くなる、鼻の働きが濟んだ後初めて口へ入れて舌で味ふと云ふ順序だから食物の味は眼と鼻と舌の三つで感ずる、眼もそれ程に大切だから食卓の上へ花の飾りをする、食卓へ花を飾る計りで無い、大隈伯爵家の如きは有名なる花壇室内に食卓を設けて西洋人を饗應せられる事がある、西洋人は日本一の御馳走と云つて悦ぶそうだが冬の寒い日に百花爛漫たる温室内で天下の珍味を御馳走になつたらそれ程愉快な事はあるまい、食卓へ花を飾るのに何の不思議がある子」と穩に答へられて若紳士は暫く口籠りぬ、

## 第三百三十 心の趣味

左りながら此の若紳士は容易に引込ず「中川君、それでは子食卓を飾るのに西洋風の粗雑な掴み挿しの花を用ゐずとも我邦には古來より練習した活花の特技があるでないか、遠州流でも古流でも池の坊でもその一流に據つて清楚なる花を食卓へ飾つたら葬式の造花然たる此の掴み挿しに勝る事萬々だ、それとも活花は風流に屬するから君の主義に合はんか子」と執念く争ひて中川を凹まさんとするは子爵家の姫君に對して窃に野心ありと見えたり、他の人々も此の問題を面白く感じぬ、老人連の中には若紳士の説を喜ぶものもあり、中川が如何に答ふるやと窃に其様子を伺つて居る、子爵家の姫君玉江嬢も心配顔に中川の顔を打眺めぬ、中川も少しく考ふる所あり「サアそれはチト面倒な問題

だ、西洋風の花飾も完全無缺とは言へないが日本風の活花とは主とする所が違ふ、西洋風のは重に色の配合を主としてあつて美しい花の色で人の眼を悦ばしめる、日本風の活花は形を主としてあつて形の巧拙で人の心に趣味を感じしめる、時と場合に依つては形を主とした方が趣味の深い事もあらうが多數の人の食會する食卓の上の飾りとしては形の力到底色の力に及ばん子、色の光線は遠くに達して其範圍が廣い、譬へば遠方の山に櫻が一本美しく咲いて居ても美の光りは觀る者の眼に映ずる、同じ場所に同じ大きさの松があつて枝振が如何に面白くとも數歩の近くへ寄らなければ其奇を賞する事が出来ない、それに色の美は直ちに人の眼に映ずる、形の奇は判斷力を費さゞれば其の奇を賞する事が出来ん、食卓の上に於て外の事へ判斷力を費す如きは却つて人の心を勞せしめるのだ、外の場合は兎も角、食卓の上は活花より寧ろ花の色を美しく配合した方が適當するだらう、一萬圓の價ある萬年青を一つ置いてあつても遠方からは見えず趣味の無い人に價値も分らんからネ」若紳士「それでは趣味が人間に不必要であらうか、満座の人が高尚な趣味を持つて居たらば無趣味なものより趣味のある物が悦ばれるだらう」中川「それは趣味の種類に因る、今の世中は我が娘に料理の趣味を教へる親よりも活花の趣味を教へる方が多い、家政や育児の趣味を教へるよりも國文や歌の趣味を教へる方が多い、それが僕の所謂る風流亡國で先づ實用の趣味を覺えてから後に外の事を習はなければならん、君は食卓の上に活花が置いてあつたら能くその趣味を解し得るだらうが食物に對しては果してそれ以上の趣味を持つて居るか子、活花を見て是れは遠州流是れは古流と一々鑑別する程ならば此の料理は佛蘭西風此の料理は英國風と一々その味を判定するだらう子、活花に天地人の原則がある通り食物には生理上の原則がある、君は活花の原則を知つて居て食物の原則を知らないとは言はれまい、ネー君今中庭で料理人が白い菓子を拵へて居る、見給へ、圓い型へ入れてデンプで焼く所だ、あれを君は御存知か」と食物問題へ引込まれて若紳士は何とも答ふる能はず、左りながら外の人の亦たその菓子を知るもの無し「中川さん、あれは何で御座います」と問ひかけしは側に居た老婦人、